

「水仙の仙人」

○ 梗概

シングルマザーの母親のアキ（35）からスパルタ教育を受けている相沢ユミ（10）は、二分の一成人式で親への感謝を発表しなければならなくなった。しかし、ユミにとっては、親への感謝を発表することは、苦痛でしかなかった。

ユミが発表会で日頃不満に思っていることをぶちまけると、会場は騒然となり、ユミは担任の藤田（40）から厳しく叱責され、母親に謝罪するように命じられた。

帰り道、今日のことを反省し、ユミは母親に謝ったが、母親は納得せず、言い争いになった。家を飛び出したところで、ユミは車に跳ねられ、怪我をしてしまった。

入院中、白いひげの不思議な老人が見舞いに来て、ユミの知らない母親のアキの一面、すなわち、両親を早くに亡くし、施設で育ったことなどをユミに話してくれた。

退院後、母親のスパルタ教育は相変わらずだが、ユミには前とは違ったように感じられた。それは、学校の用務員の松本が母親のアキに「水仙は寒い冬を越すことできれいな花を咲かせること」を聞かせたことがきっかけであったことを知った。

ユミは、白いひげのお爺さんから聞いた話や用務員の松本から母親の子供に対する真剣な気持ちを聞くことができ、前向きに生きようとする。

○ 登場人物

相沢ユミ（10）小学四年生

相沢アキ（35）母親（シングルマザー）

井上スズ（10）小学四年生 ユミの親友

藤田（40）担任（男）

渡辺（30）学習支援員（女）

松本（60）用務員（男）

老人（年齢不詳）（男）

○スーパーのレジ（夕方）

レジのおばさんが食料品のレジ打ちを
している。

相沢ユミ（10）は合計金額が心配で、
財布、合計額及びレジのおばさんの顔
を交互に見ている。

○自宅への帰り道（夕方）

ランドセルを背負い、買い物バックを
両手で持って歩くユミ。

ユミM「わたしはなんて可愛そうな子供なん
だろう。いつもお母さんに叱られ、とき
にはビンタなどの鉄拳が飛んでくる。神
様、今日も何も無いようにお願い」

○ユミのリビング（夜）

相沢アキ（35）がダイニングテーブル
でレシートを見ながらお金を確認し
ている。

ユミはテレビを見ていたが、アキの表情を見て、嫌な予感がしてビクビクしている。

アキ「ユミ、ちょっと来い。今日の買い物のおつり、ごまかしてないか？」

ユミがアキに近づいてゆく。

ユミ「さっき、ちゃんと渡したでしょ」

アキ「このレシート、622円のおつりとなっているが……もらったのは522円しかない」

と言って、釣り銭を見せる。

ユミも、釣り銭を確認する。

ユミ「わたし、522円しかもらってないよ。

あのレジのおばさん、イジワルそうな顔をしていたから、ごまかしたんじゃないの」

と言って、ユミはレジのおばさんの顔マネをする。

アキ「その場で確かめなかったのか？ 確認しないおまえが悪い」

ユミ「どうして私が悪いの？ これからちや

んと確かめるからお仕置きしないで」

と言って、両手を合わせ、お願いする。

アキ「シヤラップ。お金の大切さがわかって

いないやつにはお仕置きだ。ビンタがい

やなら夕食抜きにするか、どっちか選べ」

ユミ「じゃ、ビンタで」

目をつぶり、顔を母親の方に向けるユ

ミ。

アキ「よし、いい度胸だ。歯、くいしばれ」

ユミが歯をくいしばる。

アキがユミの頬を片手でビンタする。

しゃがみこんで頬を抑え、ユミがうめ

く。

○学校の校門（朝）

児童らがおしゃべりしながら登校して

いる。

ユミはときどき片手を頬に当てるなど、

頬を気にしながら歩いている。

ユミの親友の井上スズ（10）がユミに近づいてくる。

スズ「おはよう」

ユミの頬を見て驚くスズ。

スズ「そのほっぺ、どうしたの？」

ユミ「いつものことよ」

スズ「ユミのお母さん、元スケバンだから、

おっかないよね」

ユミ「考えが古いのよ。私、絶対、寮のある

中高一貫校に入って、家を出てやる」

スズ「ユミは優秀だから、きっと行けるよ。

私も同じ学校に行けるといいな」

○学校の教室（午後）

授業終了を知らせるチャイムが鳴る。

黒板を消し終わり、藤田先生（40）

が児童の方に顔を向ける。

藤田「今日はこれで終わり。今から渡す連絡

文にあるように、来月の第二週目の土曜

日に恒例の二分の一人式を行うから、

ご両親に必ず見せてください。今年は四年生の皆さんに作文の発表と歌を披露してもらおうぞ」

と言って、藤田が一番前の児童数名に連絡文を渡す。

ユミが連絡文を受け取り、残りを後ろに回す。

ユミが連絡文を読む。

ユミ「先生、今年もコロナで中止じゃないの？」

誰かわからないが「中止しだよな」の
声がする。

藤田先生、ちよつとムツとした顔をして。

藤田「感染が収まってきているので、今年はやることになった。今日から宿題として
両親への感謝の作文を書いてもらうから、
覚悟しておけよ」

○学校の校門（午後）

下校時の音楽と、「道草をしないように帰りましょう」との校内放送が流れる。

ユミとスズと一緒に校門を出てくる。

ユミ「スズ、二分の一人式って、なんでやるのかな？」

スズ「十歳まで育ててもらった感謝を両親に伝えるためと先生は言っていたけど」

ユミが立ち止まり、スズの方を見る。

ユミ「スズも知っているように、私、お父さんいないし、お母さんに感謝もしていないけど……」

スズ「ユミのお母さん、おつかないもんね」

と言って、ズズ、ビクついた顔をする。

ユミとスズがまた歩き出す。

ユミ「厳しいじゃなくて、ただの暴力よ。スズはいいなー。お母さん優しくして」

ズズがユミの前にまわり、ユミが立ち止まる。

スズ「そんなことないよ。うちのママ、学歴主義で、私を有名私立中学に入学させることだけが生きがいなの」

ユミ「そうなの？ でもうちのお母さんよりましよね」

スズ「手は挙げないけど、言葉の暴力はしょっちゅうよ」

ユミ「スズもけっこう苦勞してんだ。あーあー、感謝の作文、いやだな……」

○ユミの自宅のアパート（2LDK）（午後）

ユミが「だだいま」と言って玄関のドアを開ける。

ユミM「お母さん、今夜、夜勤と言っていたから、帰ってくる前に宿題の作文を終わらせないと」

○ユミの自宅のリビング（夜）

歌番組がテレビから流れている。

ユミはダイニングテーブルで作文をしている。

ユミ「あーあ、お母さんへの愚痴しか思いうかばない。つかれたー」

と言いながら、背伸びする。

そのとき、玄関の扉が開き、アキが帰ってくる。

ユミ「あれ、お母さん、今夜夜勤と言っていなかった？」

と言って、ユミは驚いた表情をする。

慌てて、書いていた作文をランドセルにしまう。

アキがリビングに入ってくる。

アキ「その予定だったけど、工場の機械の調子が悪くて夜勤は中止になった」

ユミ「そうなんだ。夕飯の支度まだしてないけど」

アキ「肉とタレ、買ってきたから、たまには豪勢に焼き肉でもしよう？」

と言って、買ってきた肉を見せる。

ユミ「焼肉、肉、肉。やったー。さっそく用意するね」

と言って、台所から焼肉用のホットプレートを用意しだす。

アキは、寝間に移動し、着替えをしている。

アキ「ユミ、学校からの連絡文はなかったか？」

と着替えながらユミに聞く。

ユミ「あー、ないよ」

と焼き肉の準備をしながら答える。着替え終えたアキがリビングに入ってくる。

アキ「肉屋でスズちゃんのお母さんに会って、学校からの連絡がどうのこうのと言っていたんだが……」

ユミ「学校からの連絡なんかないよ」

アキ「それならいいや。早速食べよう」

アキとユミが肉を焼き、食べ始める。

○学校の教室（午前）

授業開始のチャイムが鳴る。

藤田先生が教室に入ってきて、教壇で
作文をカバンから出す。

藤田「提出してもらったご両親への感謝の作
文、先生、添削したから返すぞ。相沢」

ユミが教壇に近づく。

藤田「この作文は何だ。親への感謝が一言も
書いてないじゃないか」

と言って、作文をユミに渡す。

ユミ「先生、私、親に感謝していませんから」

藤田「相沢のお母さんは、シングルマザーで
も懸命におまえを育てているんだぞ。お
母さんほときには厳しいかもしれないが、
おまえを愛しているからなんだ」

ユミはちよつとムツとした顔をする。

ユミ「わたし、優しくしてもらったことあり
ません。ときどき、鉄拳が飛んできます」

藤田が「我が意を得たり」と、納得し
た顔をする。

藤田「それみろ。それこそが愛情だ」

ユミ「鉄拳が愛情ですか？」

ユミは呆れた顔をする。

藤田「ときには、鉄拳は愛情の裏返しだ。先生もお父さんにときどき殴られたな」

と言いながら懐かしそうな顔をする。

藤田「お母さんの良いところを見つけて、書き直せ。わかったな」

ユミ「……やってみますけど……」

作文を受け取ってユミが席に戻る。

藤田「次、井上」

スズが教壇に近づく。

スズ「えー、私、親への感謝をちゃんと書きましたけど」

藤田「書いてあるのは書いてあるが、気持ちがかもっていない。もっと気持ちを込めて書き直せ」

スズ「これ以上何を書けばいいの」

と言いながらスズが作文を受け取って席に戻る。

藤田が、教室の児童を見渡したあと、
深呼吸する。

藤田「いいみんな、恥ずかしくて日頃言えていない感謝の気持ちを今回の発表会で思い切ってご両親にぶつけるんだ。お父さん、お母さんはみんなの成長を願って、ときには厳しいことを言うかもしれないが、それはきみたちを愛しているからなんだぞ」

○学校の廊下（昼）

給食の案内の校内アナウンスが流れ、
ユミとスズと一緒に給食を運んでいる。
スズ「ユミ、作文書き直すの？」

ユミ「藤田先生は、何もわかっていない。もともと体育会系で、スポコンが好きなのよ」

スズ「感謝って、命令されてするもんじゃないしね」

渡辺先生が教室から出てくる。

ユミ「あれ、渡辺先生だよ。渡辺先生、優し

いから相談してみない？」

スズ「いいね。渡辺先生、ちよつといいです

か？」

と言いながら、ユミとスズは渡辺先生
に近づいていく。

渡辺先生、振り向いて、ユミたちの方
を見る。

渡辺「なあに、井上さん」

スズ「今日の放課後、時間ありますか？」

渡辺「たぶん大丈夫よ」

スズ「それじゃ、放課後に美術室に来てもら
えますか？ 二分の一人式のこと相
談したいんです」

渡辺「それじゃ、藤田先生も一緒のほうがい
いんじゃない？」

ユミ「藤田先生じゃなくて渡辺先生に相談し
たいんです」

渡辺「なぜ美術室なの？ 職員室ではだめな
の？」

スズ「他の先生がいると話しくいんです」

渡辺「わかったわ。それじゃ、放課後、美術室に行くわね」

ユミ・ズズ「ありがとうございます」

と言って二人揃えて頭を下げる。

○美術室（午後）

書きかけの絵や彫刻が置かれている。

ユミとスズが丸椅子に座り、それらを眺めている。

渡辺先生が美術室に入ってくる。

渡辺「遅れてごめんね。藤田先生との話が長引いてしまっ」

ユミとスズが椅子から立ち上がる。

ユミ「だいじょうぶです。わたし達も来たところですよ」

丸椅子をユミの前に置き、三人が椅子に座る。

渡辺「相談は二分の一成人式よね」

ユミ「先生、当日の発表者から、わたしとスズを外してもらえませんか？」

渡辺「でも、発表者は、それぞれの家庭の事情を考慮の上、みんなで決めたいんですよ」

スズ「そうだけど、ユミは母子家庭だし、わたしのお父さんは単身赴任が長く、母子家庭みたいなもんだし」

渡辺「相沢さんや井上さんは、お母さんがいるんだから、問題ないんじゃないの？」

ユミ「そのお母さんが問題なんです。わたし、はつきり言って、お母さんに感謝なんかないんですよ」

スズ「ユミのお母さんは、元スケバンで、お母さんはおつかないんです」

渡辺「そうなの？」
スズ「藤田先生と発表者の変更を相談しても
らえませんか？」

渡辺「相談はしてみるけど……」

と言いながら、腕を組み、困ったような顔をする。

ユミ「わたし達より向いているひとはたくさんいます」

ユミとスズが立つ。

ユミ・スズ「お願いします」

と言って頭を下げる。

渡辺先生も立つ。

渡辺「わかったわ。やってみるわね」

ユミ・スズ「ありがとうございます」

ユミとスズ、ふたたび頭を下げる。

○職員室（午後）

職員室のドアを開け、藤田先生が入ってくる。

藤田「今日もやっと終わった」

と言いながら椅子の座り、背伸びをする。

藤田先生の席に渡辺先生がおどおどした顔をしながら近寄ってくる。

渡辺「藤田先生、ちょっとお時間あります

か？ 相談したいことがあるんですが」

藤田先生が振り向くが、椅子に座った

まま。

藤田「いいですよ。何かありました？」

渡辺「実は、先生の担任の相沢さんと井上さんから、来月の二分の一人成人式での発表者を誰かと交換してほしいと相談されました」

藤田「それば、みんなで相談して決めたことですので、難しいですが……」

と言いながら無然とした顔をする。

藤田「なにか理由を言っていましたか？」

渡辺「相沢さんは母子家庭で、井上さんのお父さんは単身赴任が長く、母子家庭みたいなもんだと言っていました」

藤田「それは問題にならないでしょう。さすがに両親のいない子に無理強いさせません、相沢も井上も親がいるんですから」

渡辺「そうですね。でも相沢さんは母親に

感謝できないとも言っていましたけど……」

藤田「そういう子に親への感謝の気持をもたせるのが、今回の二分の一人式の狙いです」

と言いながら、「そんなこともわからないのか」といった顔で渡辺先生を睨む。

藤田「それに、いろいろな家庭の子に発表させれば、世の中には様々な家庭があることを知るいい機会にもなるんです」

渡辺「なるほど」

と納得したような表情を見せる。

藤田先生が立ち上がる。

藤田「父親と母親がいるのは当たり前じゃないですよ。それがわかると、子どもたちは父親と母親のありがたさがわかると思うんですがね」

渡辺「わかりました」

藤田「相沢のお母さんは、ときどき、手が出てしまうこともあるようですが、教育熱心なお母さんだと思っうんですよ」

渡辺「そうなんですか？」

と驚いた表情をする。

藤田「わたしも親父によく殴られました。相沢のお母さんも愛しているからこそ、手が出ちゃうんだと思っうんですがね」

渡辺「それはちよつと違っうのでは……」

と藤田先生を直視する。

藤田先生は、渡辺先生を睨み返す。

藤田「ところで、渡辺先生は学習支援員でスクールカウンセラーではありませんよね」

渡辺「それはそうですが」

藤田「学習支援員のかたには、できの悪い子供を支援していただき、最近話題の『小4の壁』の克服を手助けしてやらなければなりません」

渡辺「わかっています……」

と言いながら目線を外す。

藤田「わかっているなら、自分の仕事に集中してください。児童の悩みを聞いてやっている暇はないはずですがね」

と言いながら椅子にすわる。

渡辺「すみませんでした。気をつけます」

と言って、頭を下げ、自分の席に戻る。

○学校の教室（午後）

渡辺先生がユミたちの教室に入ってくる。

教室を見渡し、ユミとスズを探す。

ユミはランドセルに教科書を入れ、帰る準備をしている。

渡辺先生がユミに近づく。

渡辺「よかった。相沢さん、まだ帰っていなかったのね。井上さんは？」

ユミが顔をあげ、渡辺先生の方を見る。

ユミ「スズは、トイレに行っているのですが、もうすぐ戻ると思います」

渡辺 「あのね、相沢さん、きのうのこと藤田先生とも相談したんだけど、変更はだめだつて」

ユミ 「えー、どうしてですか？」

渡辺 「藤田先生は、いろいろな家庭の発表があつたほうがいいんだつて。藤田先生、相沢さんのお母さんは教育熱心だつていってたわよ」

ユミ 「どこが？」

渡辺 「わたし、先生じゃなく、臨時雇いの学習支援員だから、それ以上強く言えなくて……。ごめんね」

と申し訳ないような表情をする。

ユミ 「先生、先生じゃないんですか？」

とユミが驚いた表情をする。

渡辺 「説明すると難しいんだけど、わたしは藤田先生のような正式な先生ではないの。井上さんにも謝っておいてね」

と言つて渡辺先生が教室から出て行く。
その後すぐに、別の入口からスズが教室に入ってくる。

スズ「今の渡辺先生じゃなかった？」

ユミ「あ、きのうのお願い、だめだって」

スズ「えー、どうして？ 理由言っていた？」

ユミ「藤田先生が、いろいろな家庭の発表が

あつたほうがいいんだって」

スズ「そうなの？」

ユミ「よくわかんない。藤田先生、私のお母さん、教育熱心だって」

と言いながら帰りの準備を再開する。

スズ「藤田先生も体育会系だから、ユミのお母さんと似ているかもね」

○学校近くの路地（午後）

ユミとスズが一緒に歩いている。

ユミ「作文、どうしようかな。そうだ！ 先生向けの感謝感謝の作文と、本番向けの不満不満の作文を作るのはどう？」

と言ってユミがスズの正面に立つ。

ズズ「それって、どうゆうこと？」

とよくわからないと言った表情をする。

ユミ「だから、表向きは感謝の作文を書いて

先生に見せ、本番では日頃の不満を親に

ぶつけるのよ」

ズズ、なるほどとニツコリとした顔を

する。

スズ「それ、いいね！」

ユミ「これから私の家で一緒にやらない？」

スズ「今日は塾がないから、大丈夫。急いで

帰ろう」

ユミとスズは走って帰る。

○学校の教室（午前）

藤田先生が教室に入ってくる。

授業開始のチャイムが鳴る。

作文を児童に渡し始める。

ユミが呼ばれ、教壇に近づく。

藤田「相沢、今回の作文、なかなか良く書けていたぞ。相沢は優秀なんだから、やればできる。これからも頑張れよ」

ユミに続き、スズが教壇に近づく。

藤田「井上、今回の作文は気持ちがかもっていただぞ。先生、うっと、きちやった」と言っつて、目頭を抑える。

スズ「先生、涙もろいですね。歳じゃないの？」

藤田「明日の本番でも頑張れよ。さて、授業始めるぞ……」

○学校の体育館（午後）

保護者は、体育館に用意されたスチール椅子に座っている。

アキも奥の隅っこの椅子に座っている。午後1時の時報とともに、二分の一人式が始まり、司会者の「児童入場」の掛け声につき、四年生が入場する。

児童が舞台の椅子に座ったところで、
藤田先生が、舞台の端のマイクに移動
する。

藤田「皆様、本日はお忙しい中、お集まりい
ただき、ありがとうございます。わたし
は四年一組の担任の藤田です。これから、
ご両親に当てた感謝の手紙を代表の児童
に披露していただきますので、ご期待下
さい。最初は、相沢ユミです。相沢、頼
むぞ」

ユミが舞台の中央に用意されたマイク
の前に移動する。

ユミは会場を見渡し、アキがいること
を確認する。

ユミ「お母さん、わたしを生んでくれてあり
がとう……と言いたいところですが、わ
たしはむしろ恨んでいます。わたしを何
で生んだの？ わたしはお母さんの子分
ではありません」

会場がざわつき始める。

参加者の母親が「なにあれ」などと言
ってママ友と話し出す。

アキ、一度ユミを見たが、そのあとは
下を向いている。

ユミ「言うことを聞かないわたしに鉄拳を振
るうのは、やめてください。先生は、鉄
拳は愛情の裏返しだと言いますが、わた
しにはそうは思えません。そんなお母さ
んに、感謝を強要するこの二分の一人
式は大嫌いです。それと……」

藤田が慌てて、舞台端のマイクに近
づく。

藤田「相沢、もういい。やめるんだ。みなさ
ん、ここでちよつと休憩にします。その
ままお待ち下さい」

会場、ざわめいている。

アキは、そーつと会場を出ていく。

藤田「相沢、ちよつと来い」

ユミが藤田先生のところに移動する。

藤田「どうゆうことだ。先生が見た作文の内容とまったく違うぞ」

と言つて、怒った表情でユミを睨む。

ユミ「気が変わったんです」

ユミはケロツとした表情で藤田先生を見返す。

藤田「いいかげんにしろ。お前はお母さんの気持がまったくわかっていない。せっかく来てくれたお母さん、帰っちゃったぞ。今日はすぐに帰つて、お母さんにちゃんと謝るんだ」

ユミはうつむく。

ユミ「……わかりました」

と小さな声で言つてユミが会場をしょんぼりと出てゆく。

会場はまだ、ざわついている。

藤田「みなさん、ちよつと手違いがありました。だが、二分の一成人式を再開します。ちよつと順番を変え、四年一組全員で『未

来へ』を合唱しますので、もうしばらく
お待ち下さい」

児童たちが合唱のため、舞台の全面に
整列しだす。

○校門近くの花壇（午後）

用務員の松本が花壇の草取りなどをし
ている。

ランドセルを背負ったユミは、「帰り
たくないな」とつぶやきながら、校門
近くをウロウロしている。

松本がユミに気が付き、近づいてくる。

松本「どうしたの？ 具合悪くて早退なの？」

ユミ「あ、松本さん。具合悪くないけど、先
生が帰ってお母さんに謝れって言うから
……」

松本「何かしたのかい？」

ユミ「今日、二分の一人式があったでしょ
う。わたし、そのとき、感謝じゃなく、
お母さんは嫌いと言っちゃった。そうし

たら、発表を途中で止められ、先生がすぐ家に帰って、お母さんに謝れって……」

松本「あはは！」

と松本が大笑いする。

松本「本音を言っちゃったのか。それはお母さんも先生も困ったろうね」

ユミが花壇の水仙に近づく。

ユミ「松本さん、この花、いい匂いできれいね。なんていう花？」

ユミが松本の方を見る。

松本「その花は水仙、雪中花（せつちゅうか）とも言われ、雪解けと同時に春の訪れを告げる花なんだ」

と松本もユミに近づき、しゃがむ。

ユミ「これが水仙か。それにしてもいい匂い」
松本「水仙は可憐な花で匂いもいい。しかし、毒を持つ有毒植物なんだよ」

ユミ「え、毒持っているの？」

驚いて、ユミが松本の方を見る。

松本「葉っぱがニラに似ているから、食べて中毒になるひとが毎年結構いるよ。絶対食べないでね」

ユミ「食べないけど。しかし、なぜ毒を持っているのか不思議ね」

松本「それは生存競争に勝つためだよ。生きるためには、良いことをしながら悪いこともする。人間も同じ」

ユミ「お母さんは、わたしをいじめることしかしないけどな……」

松本「よく、考えてみて。お母さんはユミちゃんを叱るかもしれないけど、洋服を買ってくれたりするだろう」

ユミ「そーかな……」

松本「それより、早く帰って、お母さんに謝ったほうがいいよ」

「わかりました」と言ってユミが立ち上がり、校門の方へ帰ってゆく。

松本は心配そうな目で、ユミを見送る。

○帰り道（午後）

自動車が行き交う。

ユミがトボトボ歩く。

ユミM「お母さん、ケチだけど、学費も給食費もちゃんと持たせてくれる。今日の発表、ちよつとまずかったかな。お母さん怒っているだろうな……」

○ユミの自宅のアパート（午後）

ユミが玄関ドアを開け、「ただいま」と小声で言いながら家に入る。

ユミ「（小声）お母さん、いるの？ あれ、まだ帰っていないのかな？」

○ユミの自宅（午後）

リビングの左側の母親の部屋のふすまを開けると、母親が座っている。

ユミ「あれ、お母さんいたんだ。返事してよ」
アキが振り向く。

アキ「ユミ、今日のことでお母さんに何か言うことはないか？」

ユミ「……、お母さん、今日は……ごめんなさい。怒っているよね」

アキ「あたりまえだろ。お前の発表の内容にではなく、やり方に頭にきた」

ユミ「どういうこと？」

アキが立ち上がり、ユミに近づく。

アキ「お前がお母さんを嫌っていることは、日頃のお前の態度からわかっていた。感謝してもらおうとは思っていない」

ユミ「じゃー、なぜ怒っているの？」

アキ「不満があるなら、なぜ直接お母さんに言わない？ あんな大勢の前で恥かかせやがって」

ユミ「大勢の前で発表したことがいけないの？」

アキ「そもそも、二分の一成人式に関する連絡文、最初隠していたよな。なぜ、隠していた。お母さんが参加するのがそんな

に嫌だったのか。それに、あんな卑怯なやり方、絶対許さない。吊し上げと同じだ」

ユミ「吊し上げて……。あれは発表会だよ」
アキ「いいや、吊し上げだ。お仕置きを覚悟してんだろうな」

ユミ「謝ったじゃない」

アキ「シヤラップ！」

ユミ「お母さんなんか、大っきらい。わたしの話なんか、ろくに聞いてくれないじゃない。絶対、お仕置きなんか、受けるもんか。お母さん、わたしのこと、なんにもわかっていない！」

と言って、ランドセルを捨て、なにか叫びながら玄関から飛び出してゆく。

アキ「ユミ、逃げるな！ まだ、お仕置き済んでないぞ！」

と言いながらアキはユミを追いかける。道路の方から車のクラクションとブレーキの音がする。

○アパート近くの路地（午後）

ユミが路地の端に倒れている。

その近くに、自動車が止まっており、
運転手の男がユミに近づく。

アキもユミに近づき、抱き起こす。

アキ「ユミ、ユミ、だいじょうぶか？」

アキが近づいてきた男を振り向く。

アキ「てめー、娘を跳ねたね。早く救急車を

呼ばんかい！」

男は慌てて携帯を出し、電話する。

救急車にユミが運ばれ、アキも一緒に
病院に運ばれてゆく。

○病室（夜）

ユミが頭に包帯を巻かれて寝ている。

アキは、心配そうにユミの方を見てい
たが、その後、眠ろうとして目を閉じ
る。

ユミが目覚め、アキがいることに気がつく。

ユミ「お母さん、お母さん」

アキが、目を開け、ユミの方を見る。

アキ「ユミ、目が覚めたんだね」

ユミ「お母さん、ずっとついていてくれたの？」

アキ「当たり前じゃないか。目が覚めないんじゃないかと心配したんだよ」

ユミ「わたし、どうしてここにいるの？」

アキがユミの顔に顔を近づける。

アキ「覚えてないのかい？ 家を飛び出した時、車と接触して、頭を打ったんだよ」

ユミ「そうなの」

と驚いた表情をする。

アキは顔を上げる。

アキ「検査した結果、内出血がないから、目が覚めれば大丈夫と先生が言ってくれたんだが……、なかなか目が覚めなくてね、心配したんだよ」

ユミ「そうなんだ。私、よく覚えていない。

なんだか眠くなってきた。お母さん、家に帰っていいよ」

アキがまた顔を近づけ、頭を優しく撫でる。

アキ「わかった。家に帰って着替え持つてくるから、ぐっすりお休み」

○病室（昼）

寝ていたユミが目覚める。

ユミ「よく寝たな」

と言いながら、腕を伸ばす。

別途のそばに老人がいることに気づく。

ユミ「あれ、あなた誰ですか？」

ユミのベットの脇で白いひげの老人が新聞を読んでいる。

老人「ユミちゃんが怪我をしたと聞いて、見舞いに来たんだ」

と言いながら、新聞を閉じ、老人がにっこり微笑む。

ユミ「そうですね……。お母さんの親戚のかわりですか？」

老人「そんなもんだ。小さいときしか会っていないから、わかんないかな」

ユミ「はい、ちよつと思ひ出せません」

老人「そうかそうか。それより、たいしたことなくてよかったね。自動車とぶつかったと聞いて肝を冷したよ」

ユミ「わたし、よく覚えていないの」

老人「お母さんも、安心したろうよ。お母さん、『ユミが怪我したのはわたしのせいだ』と言って、落ち込んでいたよ」

ユミ「でも、お母さん、優しいのは今だけかな？ 怪我が治ったら、元に戻るんだろうな」

老人「元に戻るって？」
と不思議そうな顔をする。

ユミ「お母さん、スパルタで、暴力的なんです」

老人「あはは！」

と大声で笑う。

老人「ユミちゃんのお母さんは、幼い頃に両親を亡くして、施設で育ったから、愛情の表現の仕方がわかんないかもしれないな」

ユミ「お母さん、施設で育ったの？」

ユミが驚いた表情をする。

老人「そうだよ。でも、ユミちゃんには人に迷惑をかけない、一人前のオトナになってほしいとわしにいつも話しているよ」

ユミ「そうなんですか」

老人「日頃厳しいのは、ユミちゃんが一人でも生きていくため甘やかさないとお母さん心に決めているからじゃないのかな」

ユミ「理解不能」

老人「もう少し大きくなったら、ユミちゃんにもわかるよ」

ユミ「わたし、わかりたくない……」

老人「それじゃ、わしは帰るよ」

と言って老人が立ち上がる。

ユミ「あの一、お爺さんの名前は？」

老人「白いひげの爺さんが来たといえればわかるよ。それじゃ元気だな」

と言いながら、歩きながら後ろ手で手を振る。

○病室（夕方）

院長を呼び出す院内のアナウンスが流れている。

夕日が病室に差し込んで、目覚めたユミが眩しそうにする。

ユミ「お母さん、夕日が眩しいから、カーテン閉めてくれない？」

荷物を整理していたアキが気づき、ユミの方を見る。

アキ「ユミ、目が覚めたかい？ カーテン締めるね」

と言って夕日が差し込む窓のカーテンを閉める。

ユミ「ありがとう。今日は何曜日？」

アキがベットのそばの椅子に座る。

アキ「火曜日だよ」

ユミ「火曜日か。結構、寝ちゃったんだ」

アキ「途中で、何度か起きたようだけど、覚えてないのかい？」

ユミ「よくは覚えてないわ。あーそうだ、お母さんがいないとき、白いひげをはやしたお爺さんがお見舞いに来ただけど、誰なの？」

アキ「白いひげのお爺さん？ 名前は？ 何歳位だい」

ユミ「名前言ってなかったけど、白いひげのお爺さんと言ったら、お母さんはわかるって言っていたよ」

アキ「そんな知り合い、いたかな？」
と考え込むような表情をする。

ユミ「えー、それじゃ誰だろう」
「やっぱりわからない」といった表情になり、アキがユミの方を見る。

アキ「寝ぼけてたんじゃないのかい」

ユミ「お母さんは、幼い頃に両親を亡くし、

施設で育ったといっていたけど」

アキ「そのとおりでが、誰だろうね。その爺

さん、他にになにか言ったのかい？」

ユミ「特に何も言っていなかったけど……、あれ、なんかいいにおいするね。これ、水仙の匂い？」

アキ「そうだよ。水仙の香りだよ」

と言って花瓶の水仙を持ってユミに見せる。

ユミ「この水仙、どうしたの？」

アキ「今日、事故のことを学校に報告しに行

ったとき、校庭の花壇に咲いているのを、ちよつともらってきた」

ユミ「あーあの水仙か。ちゃんと松本さんに

ことわってきた？」

アキ「松本さんって？」

ユミ「用務員のおじさん」

アキ「あー、松本さんね。そうそう、松本さんにもらってきた……」

と言いながら、花瓶をもとに戻す。

ユミM「お母さん、わたしのために校庭の水
仙、勝手にとってきちゃったんだ」

○学校近くの路地（朝）

児童たちがおしゃべりをしながら登校
している。

頭に小さめの包帯を巻いたユミが歩い
ている。

スズがユミに気づき、近づいてくる。
スズ「ユミ、おはよう。ごめんね、お見舞い
に行けなくて」

ユミ「いいよ、怪我也たいしたことなかった
から」

○校門（朝）

校門近くでユミとスズは松本と出くわ
す。

ユミ「松本さん、おはようございます」
松本「ユミちゃん、怪我大丈夫かい？」

ユミ「へっちやらです」

松本「今日、下校の時、ちよつと話したいことあるから、花壇に寄ってもらえるかな」

ユミ「わかりました。話ってなんですか？」

松本「水仙のことかな。それじゃ待っているから」

松本は職員玄関の方へ移動する。

ユミとスズは下駄箱のある方に行く。

○校門近くの花壇（午後）

下校時のアナウンスが流れる。

ユミが花壇にいる松本に近寄る。

ユミ「松本さん、話ってなんですか？」

松本が作業の手を休め、ユミの方を向
き、手袋をとる。

松本「実は、今週の月曜日にユミちゃんのお
母さんと会ってね。お母さん、『ユミが
怪我したのはわたしのせいだ』と言って
ひどく落ち込んでたんだ」

ユミ「そうですか」

松本「わたしも慰めようがなくて、それで、お母さん、水仙が好きだと言っていたので、水仙を切ってあげたんだ」

ユミ「わたし、お母さん、学校の水仙、勝手に採ってきたと思っていた」

松本「お母さん、水仙あげたらちよつと元気になってね。それでつい、水仙は寒さを体験しないと花を咲かせないこと、冬の寒さが厳しいほど、春にきれいな花を咲かせることも話したんだ」

ユミ「それで？」

松本「そうしたら、お母さん、ちよつと考え込んでね、『わたしもユミが元気になったら、将来、大きな花を咲かせるために、もっと厳しく育てます』と言って、帰っていったんだ」

ユミ「なんだそれ」

松本「余計なことを言ってしまったような気がして、ずーっと気になってたんだ。お

母さん、厳しくなったりしていないか

い？」

ユミ「だいじょうぶです。前から厳しいけど、最近ちよつと変わってきたかな」

松本「それはよかった。安心したよ」

松本、ホツとした顔をする。

ユミは花壇の方を見て、水仙を見つけ、近づいて、水仙の前にしゃがむ。

ユミ「松本さん、水仙って、ほんといい匂いね」

松本「海外では、ガン患者をサポートする団体の多くで、水仙が『希望』のシンボルとして募金活動などで用いられているんだよ」

ユミ「あれ、前に毒を持っていると言っていたなかった？」

松本「毒を持っているのは本当だよ。でも、生きる希望のシンボルとしても用いられているんだ」

ユミ「どうして？」

松本「よくわからないけど、生きるために、
良いことをしながら悪いこともする、し
たたかな植物だからじゃないかな」

ユミ「ふーん？」

と言いながら考え込むユミ。
立ち上がり、松本の方を見る。

ユミ「松本さん、水仙の仙人って、いると思
いますか？」

松本「え！ 仙人？」

驚いた表情をする。

ユミ「そ、白いお髭をはやしたおじいさん」

松本「どうだろうね。私は見たことないけど。

でも花の精の話はよく聞くから、仙人が
いてもおかしくないか」

ユミ「絶対にいるよ。絶対」

と言いながら自分を納得させるため、
頷く表情をする。

ユミは松本に「さようなら」と言いな
がら校門の方へ歩いてゆく。
下校時の音楽が流れている。

スズが走って、先を行くユミに近づく。

○校門近くの路地（夕方）

スズ「ユミ、待って。一緒に帰ろう」

スズがユミに追いつく

ユミが立ち止まり、振り返る。

ユミ「スズ、まだいたんだ」

スズ「今日は掃除当番だからね」

ユミとスズが歩き出す。

ユミ「あ、そうか。ところで、あのあとどう
なったの？」

スズ「あのあとって？」

ユミ「二分の一人成人式よ」

スズ「あーそうか。ユミは、途中で帰っちゃ

ったもんね。あのあと、みんな普通に発

表して、普通に終わったよ」

ユミ「スズも日頃の不満、ぶつけたの？」

スズ「言いづらいんだけど、わたし、ユミの

あとだったの、勇気なくて、先生に出

した方を発表したの。ごめんね、約束破
って」

ユミ「いいよ、気にしないで。ところで、水
仙の仙人って、いると思う？」

と言って、ユミがスズの方を向いて立
ち止まる。

スズ「なにそれ」

スズもユミの方を向き、不思議そうな
顔をする。

ユミ「病院に入院している時、白いひげのお
爺さんがお見舞いに来たの」

スズ「白いひげのお爺さん？ 親戚か、近所
のお爺さんじゃないの？」

ユミ「お母さんの知り合いと言っていたので、
お母さんに聞いたら、知らないって」

スズ「へー」

ユミ「それでね、わたし、その人は水仙の仙
人だと思うの」

スズ「どうして？」

ユミ「そのお爺さんが現れた時、水仙のいい匂いがしていたから。それに、見た目も昔話に出てくる仙人みたいでしょ」

スズ「その仙人さん、なにか言ったの？」

ユミ「教えな―い」

スズ「いじわる。教えてよ」

ユミ「だ―め。スズ、走って帰るよ」

と言って、ユミが走り出す。

スズ「待って―。仙人さん、なんて言ったたのよ―」

と言ってスズもユミのあとを追うように走りだす。

○公園（夕方）

公園のブランコで親子が遊んでいる。

公園の花壇にも水仙が咲いており、親子が匂いを嗅ぎながら、水仙を見ている。

ユミが公園の入口まで走ってきて立ち止まる。

そのあと、スズもユミに追いつき、

「やっと追いついた」と言いながら、
ゼーゼーと息をする。

ユミが公園の花壇の方を見ると、水仙
を見ている親子の近くに白い髭の老人
が優しく親子を眺めているのを発見し、
「やっぱりいる」と独り言をつぶやく。

スズ「えー、なにか言った？」

ユミ「やっぱり、いるよ」

スズ「誰が？」

ユミ「水仙の仙人だよ！」

スズ「どこに？」

ユミ「公園の花壇だよ。見てよ」

と公園の方を指差す。

公園の花壇には親子が会話しながら水
仙を見ているが、老人の姿はない。

スズ「どこよ。仙人みたいな人いないじゃん」

ユミ「あれー、確かにさっきいたのよ」

スズ「見間違えよ。ユミ、頭打ったから幻が
見えたかもよ」

ユミ「わたし、確かに見たのよ。おかしい

な？」

スズ「走ったらお腹すいちゃった」

ユミ「わたし、まだすいてないから、走って

帰るよ」

と言ってユミがまた走り出す。

スズ「え、また走るの？ 待ってよ」

と言って、スズも仕方なく、走り出す。

(終)